



日 口 交 流

発行 : 特定非営利活動法人 日口交流協会

E-mail:nichiro@nichiro.org

Home Page http://www.nichiro.org

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号

Tel : 03 (5563) 0626 Fax : 03 (5563) 0752



NPO 日口交流協会第19回 (通算55回) 通常総会開催

内堀 學

2019年3月23日(土) 11:00より、新橋生涯学習センター303号室にて当協会の第19回通常総会が開催され正会員20名が出席した。総会の議長には定款26条に基づき服部副会長が選出され、続いて定款27条に基づく定足数の確認があり、正会員出席者20名、書面表決者65名、委任表決者13名の計98名となり、正会員数213名の1/3以上であることが確認され、総会の成立が確認された。定款30条に基づく議事録署名人には、内堀専務理事、千葉常任理事が選任された。



のロシア派遣が実施された他、日本伝統文化講習会、ロシア語日本語教育、ロシア留学支援、講演会、アウトドア交流事業他幅広く日口文化交流が実施され、2年度継続して収支が黒字化され、年度期間収支665,460円、次期繰り越し収支が850,776円となった旨報告された。2019年度事業計画では文化交流、ロシア留学支援、ロシア語教育に重点をおき、従来の事業活動を継続しながら、協会員の高齢化対策として次代の活動をにう若手会員の増強、リーダーの発掘に務める方針が示された。2019年期間収支では79千円の黒字、繰り越し収支930千円を見込む。

続いて議案審議に移り、第1号議案「2018年度事業報告」、第2号議案「2018年度収支決算報告」、「2018年度会計監査報告」、第3号議案「2019年度事業計画」、第4号議案「2019年度収支予算案」が審議され原案通り承認され、通常総会は11:30終了した。

総会終了後12:00より新橋「新橋亭新館」にて懇親会が開催され、江守副会長のご挨拶、朝妻副会長のご挨拶を頂き、同副会長の乾杯に続き、和やかな懇親の一時が過ごされた。

懇親会には役員会員23名が参加され、岩佐、大沢、名島(貴)、藤本、女良会員、及び土屋理事奥様(万里子様)の自己紹介が行なわれ役員会員相互間の理解が深められた。

(専務理事)

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円から、いくらでも結構です。

振込先：郵便口座00160-9-66486、加入者：日口交流協会
連絡先：日口交流協会事務局 E-Mail:nichiro@nichiro.org
*玉田文子氏、北澤法隆氏からご寄付を頂きました。ご協力有難うございます。

訃報

東久留米市日露交流協会の番場憲雅氏が、1月27日にご逝去されました。番場氏は顧問として長年、協会に貢献されていらっしゃいました。ご尽力に感謝申し上げますと共に、謹んでご冥福をお祈りいたします。



お知らせ

●第3回夏期ロシア語現地学習会

好評により、今年も短期留学を実施します!

期間:2019年8月4日(日)~11日(日)

内、授業期間5日(月)~9日(金)

午前:授業、午後:市内、ビール工場、博物館等見学、アムール川クルーズ、交流イベントなど。

*希望により午後、個人レッスン(別料金)受けられます。

場所:太平洋国立大学(ハバロフスク)

費用:会員80,000円、一般90,000円+航空券(各自手配)
(授業料、寮費、現地送迎、ビザ取得、保険料が含まれます)

*航空券、別途ホテル希望の方は旅行社をご紹介します。

締切:5月9日(木)

●第59回マトリョーシカ絵付け教室

日時:2019年4月7日(日)13:00~16:00

講師:菅野エレナ

場所:田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」造形表現室
会費:3,000円(5個セットの教材、講師代、お茶代含む)

●第12回テーマ別ロシア語講座 スマホ・PC編

日時:4月21日(日)13:00~16:00

場所:田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」学習室D1

費用:会員3,000円、一般4,000円

講師:オクサーナ・ピスクノワ

●ロシア語教室生徒募集中!

平日クラス月4回5,500円×3ヶ月前納

初級2(月)19:30~21:00(ナタリア先生)

初級1(水)18:30~19:30(ナタリア先生)

準中級会話(月)18:00~19:30(ナタリア先生)

中級(火)18:30~20:00(イローナ先生)

上級(土)10:00~11:30(エレナ先生)

購読(第4土)13:30~15:00(アレクサンドル先生)

*見学ご希望の方は、必ず予め事務局にお問い合わせください。講師の都合で休講になることもございます。

*お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで

Tel:03-5563-0626 nichiro@nichiro.org

☆留学生便り (47) ☆

ペテルブルグ留学

岡村 洋輔

いつの頃からか・・・、ラスコーリニコフが「強欲な金貸し老婆なら殺してもいい」ということを考えながら歩いたネヴァ河の橋はどこだろう、ソーニャの父親、九等官文官マルメラドフが馬車にはねられたのはネフスキー通りのどの辺りだろう、1917年10月革命の時レーニン率いる労、農、兵がなだれ込んだ冬宮の場所は今どうなっているだろう・・・等々想像と現実を織り交ぜたペテルブルグという街を自分の目でゆっくり見てみたいというバカなことを考えるようになっていました。それには、留学しかないと思うようになって問い合わせたらなんと72歳の老人でも受け入れてくれると聞いてバカなことに本気で乗り出してしまいました。

サンクトペテルブルグ大学のロシア語教室に入れてもらうことになって、クラス分けのテストの結果、下から2番目のレベルになったけれど一番下でなければ無理と思っていたので聞いてみたら空気がなかったみたいでした。クラスはハイスクール在学中の18歳から20代前半の大学生など12～3名全てが中国人ですが、担任の先生二人を含めて皆すごく親切に面倒を見てくれます。ゆっくり街の散策などどころではなく膨大な宿題と予習、復習に追まわられています。寝ている時も分けのわからないロシア語の単語が頭の中を五月蠅く飛び回っていてこの一月半ゆっくり寝られた日がありません。週5日毎日ロシア語の勉強だけをしているのだから次か

ら次へ新しいことを覚えなければならないのは当然ですが、如何せん記憶力、暗記力や視力の衰えは争いようもなく、クラスメイトや先生の温情にすがりながら必死で頑張っている状況です。

それにしても他のクラスも大半が若い中国人ではあるのですが、これだけ広くロシアの国立大学が門戸を開いているのに日本人がバカなことを考えた老人位しか見ないというのは何故なのでしょう。外務省から在留日本人向けにメールが届くようになって中身は危険地域情報だけで、国がとても本気でロシアの国と交流を深めたいと考えているようには思えません。

ペテルブルグの冬はもっと厳しいものと想像していたのですが、よく滑る凍った道と屋根から滑り落ちてくる氷やつらなどに気を付けていれば結構快適です。警察の人に危険だから、と怒られましたが、凍ったネバ川 (写真) を歩いて冬宮 (教室の対岸) まで渡ったときは冬にきて本当に良かったと思いました。滞在先の管理人さんに「明日は日曜日」と覚えたてのロシア語で言ったら満面笑みで「ウラー！」とってくれました。それではまた。



サハリン再訪

畔上 明

戦前の日本時代「旭ヶ丘」と呼ばれた頃から山スキーを楽しむ場となっていた「ゴールズスイ・ヴォーズドフ (山の空気)」、その麓の林の中に奥床しく控えた「サンタ・リゾート」ホテルに宿泊してきました。

サンタクロースの故郷フィンランドのロヴァニエミにも同様の名のホテルがあることから、雪景色が映えるこのユージノ・サハリンスクのホテルも、「サンタクロース」の「サンタ」かと思われがちで、実際、ホテルの成立ち、由緒を知らぬリゾート客で3月も満室続きという盛況。

30年前このホテルのプロジェクトが立ち上がった時、私は「大陸トラベル」でサハリン旅行開発の事業に取り組んでおりました。ペレストロイカでソ連が大きく変わろうとした時期、日ソ合弁企業第一号として「イギルマ大陸」製材工場を完成させ成功に導いた「大陸貿易」が、合弁第二号としてサハリン船舶公団との間に「サハリン大陸 (サンタ)」を立ち上げ、ホテル建設を進めていた、その顧客開拓の為に旅行事業でした。

大型ショッピングモールに行けばあふれ返らんばかりの魅力的な商品に驚かされる現在のロシアの状況からは信じられぬほど、当時のソ連邦崩壊前夜は物がなく、サハリンも手のつけようのない自然を感じるばかりであり、樺太に戦後も残留を余儀なくされた300人の日本人と連絡を取り合った日本経済新聞社の小川敵一氏が中心となって「サハリン同胞一時帰国促進の会」の運動が始められた頃でもありました。

北原白秋「フレップ・トリップ」、三浦綾子「天北原野」、李恢成「サハリンへの旅」などを読んでイメージをふくらませ、1ヶ月かけて「サハリン船舶公団」のプリマコフ氏と共にヘリ



コプターでサハリンの南から北の果てまで巡りそこで撮影したビデオの上映会、変わりゆくソ連の姿を新聞に掲載してもらう等、さらに某大学の探検部のポロナイ川カヌー下り、釣りやハンティングの相談、樺太から引揚げて来られた方々の望郷ツアーのアテンドなどをした思い出の日々が、

30年振りに甦ることになったのでした。

大陸貿易のサハリン事業に尽力した当時の専務が一昨年夏逝去され、そのご遺族が、ホテルそのものは係争により日本の手を離れてしまったものの、関係したロシア人の方々との交流はいつまでも続いたことから、お世話になったお礼に今年3月サハリンを訪れたいということで同行させて頂いたのでした。

故人のお人柄と情熱が如何にロシア人との深い友情を築き上げていたかは、その尽きることのない歓待ぶりに示されておりました。

今回の訪問のハイライトはユージノ・サハリンスクから車で1時間南下、オホーツク海の岸边にたどり着いたところで、氷上をスノーモービルで走って40分、氷に穴をあけてコマイ、キュウリウオなど、一行4人で140匹釣上げ夕食に舌鼓を打ったことでした。

防寒靴から釣り道具、折畳椅子、弁当の黒パンに脂身、そして寒さ避けにウィスキーまで用意され、釣りをしていた足下の氷をロシア人特有の大胆さと茶目っ気でグラスに投げこみ振舞ってくれたときには、楽しさと幸福感に満たされたものでした。(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

サンクト・ペテルブルグのおもてなし前線

田中 美穂子

最近の話。市内中心地の店で働く20代前半のロシア人女性の友人が「昨日、閉店15分前に、外国人の(中国系?)観光客がやって来たの。でも言葉が全然通じなくて。」と言った。この街で、観光業に長く携わる当方<閉店15分前>という、誰もが早く店仕舞いをしたい時間にやって来た、見るからに手のかかりそうな外国人に、この若いロシア人がどう対応したのか興味を沸かした。彼女が働く店は、この街に溢れる、いわゆる観光客向けの土産物店ではない。それなのに外国人とのやりとりを楽しそうに語る彼女に、「閉店時間過ぎてたんじゃない?」と聞くと、「でもね、言葉の通じない外国人の手助けを何かしたくて。やっとわかって、役に立って、スパシーボ(ありがとう)って言って貰えたの。勤務時間大分過ぎちゃったけど、すごくうれしくて・・・。」と。

世界遺産で知られるこの街は、言わずと知れたロシアの一大観光都市だが、ロシア人の提供するサービスが、おもてなし精神あふれる日本に慣れた方には、温度差がありすぎて、それを指摘される事が少なくない身には、彼女の言葉は「目から鱗」だった。ひと昔前、私は「ソ連時代、この国は働く人の国でした。働く勤労者が、サービスを受けたい人より偉かったんです。交通機関に乗る人より、それを運行させる人の方が偉く、店では売り子の方が買い物客より・・・。だから、スマイル0円の発想はあまりなかったんです。ソ連が崩壊して早〇年が過ぎましたが、その感覚は、そうすぐにはなくなりません。どうか、国事情が違う事をご理解下さい。」

~~~~~

### 国際放送史研究の戯言No.002 戦時中のモスクワ放送日本語番組は?

#### その2.改善はみられたのか

島田 顕

前回は、戦時中のモスクワ放送の日本語番組について書いた。今回はその続きである。戦時中の日本語番組は欧州戦線に関するニュースと解説のみで、音楽などの娯楽のものはなかったのだが、それでも欧州戦線のニュースを日本に伝えることには意味があった。

コミンテルン書記長ディミトロフは、中国における日本共産党の指導者であった野坂参三に「日本向けラジオ番組では、ファシストドイツの利害によって、日本人民がソ連に対する戦争に駆り立てられており、日本軍兵士たちがヒトラーのドイツが世界の支配者になることを達成するために自らの血を流す必要はないという命題を論証しなければならない」という書簡を送っている。この文書から、日本向け日本語放送が日本を対ソ戦争に向かわないことを促すためのものだったことが明らかである。

しかしながら、日本向け日本語放送の効果はなかったと結論付けることができる。当時日本では短波放送を聴くことが禁止されていて、日本人は短波放送を聴くことがなかったからである。日本のラジオ放送は中波放送であり、各家庭に普及していたラジオも大体が中波ラジオだった。

このような日本国内のラジオ聴取状況に対し、遠隔地へ放

と、ロシアをいたずらに悪く言われたくなくて、よくこんな苦しい言い訳をしていた。

ソ連が崩壊して10年経っても、ホテルのおばさんの無愛想な事。おばさんに言う事を聞いてもらいたくて、こちらが随分気を使った。20年経って、無愛想なおばさんの娘世代になっても、店員に「チェボー?(何?と優しく問うのではなく、何なのよっ、わかんなくて面倒くさいわねっ。のような言い方。)」と何度となく言われ、買い物に幾度怖気づいた事か。

それがどうだろう、30年近くの年月が過ぎると、いつの間にもやらホテルや空港や大きな店舗では、英語を流暢に操る無愛想なおばさんの孫世代が働き手として活躍を始めていた。言葉だけではなく、スマイル0円も少しずつ浸透し始めた。無表情のレジのおばさんが、「(当店で) 買い物を(してくれて) ありがとう。またのお越しを。」と言うのを聞いて驚いた日があったが、最近大手スーパーでは当たり前になった。(勿論、まだ言わされている感はあるが。)  
「お客様のご意見をお聞かせください。」的なカスタマーサービスも現れている。

けれど、<閉店15分前>に頑張った若い友人の話の聞いて、日本の桜前線ではないが、サンクト・ペテルブルグのおもてなし前線が、冬將軍優勢時代から、雪解け、芽吹き、本格的な春到来と進んできたのだという事を感じた。

~~~~~  
送電波を届ける必要性から、国際放送は短波放送が主流だった。またソ連国内の放送も、広大な面積の国土の隅々にラジオ番組を届けなければならなかったことから、やはり短波を主に使用してきた。短波が放送発展の土台だった。

ちなみに、このことについて例になるかどうかはわからないが、BCLという趣味が流行った1970年代末期に、当時はまだソ連の15の共和国の一つだった中央アジアのタジク共和国[現タジキスタン共和国]からのラジオ・ドゥシャンベのタジク語の短波放送を聴いたことがある。「インジョー・ドゥシャンベ」。放送開始のアナウンスしかわからなかったが、この言葉が今でも耳に残っている。タジク語放送だから国内向け放送なのだが、短波放送だからこそ日本でも聴くことができたのである。

モスクワ放送日本語番組の送り手は、日本国内でモスクワ放送が聴きにくい状況だったことをつかんでいて、すでに改善の努力を行っていた。ソ連人民委員会議ラジオ放送委員会議長であるプーズィンがソ連共産党中央委員会に宛てた報告では、「1944年6月にラジオ委員会が東京から受け取った報告の中では、我々のラジオ番組の東京での受信状況が不十分であると述べられている。[中略]この後ラジオ番組の技術的基盤が強化された」と語られている。加えて1944年11月、さらに1945年1月にモニタリング調査が行われ、日本国内のモスクワ放送日本語番組の聴取状況が改善されたことが報告されている。しかしこれらの改善は短波送信機に関してのみであり、中波送信機による放送に切り替えて日本国内の聴取層の幅を広げることにはなかった。ソ連側は、あえて一部の者たちしか放送を聴くことができない状況を、日本国内で形作っていたのである。

モスクワ「ムゼイ」巡り・その15

クビンカ戦車博物館
Танковый музей в Кубинке

大矢 温

戦車バイアスロン、という競技がロシアにはある。冬季スポーツのバイアスロン、これを戦車でやる。本物の戦車が平原を爆走し、実弾の戦車砲を射撃してタイムとポイントを競う。最近では旧ソ連圏のみならず中国やインドも参加するようになって、すっかり国際競技に成長している(Youtube「Танковый биатлон」で検索)。その会場となるのがモスクワ近郊の「パトリオット公園」。戦車バイアスロンの開催日以外も戦車や戦闘機が屋外展示してあって、軍事オタクのパラダイスなのだが、今回ご紹介するのはこの「パトリオット公園」に併設されている戦車博物館(Площадь №2 музейный комплекс)だ。



至る古今東西(英米露仏伊日他)の戦車、自走砲、装甲車が保管・展示されている。ここには第二次世界大戦時のナチス・ドイツのIII号、IV号戦車やソ連軍のT-34といったポピュラーな戦車もちろん展示されているが、ここでの目玉はナチスの超重戦車VIII号 Maus 戦車やミーネンロイマー地雷処理戦車、あるいはソ連軍の試作戦車など、世界に一両しかない超レアものだ。装甲を強化したり、兵装を取り換えたり、あるいはエンジンを改良したりと様々なアイデアが試されたことが分かる。あたかも大昔の恐竜がさまざまに進化し、そして滅んでいったように、ここに並んでいる兵器たちも当時の技術の粋を凝らして開発され、そして第一線を退いて行ったのだ…などと感傷にふけている暇はない。なにしろ展示台数が膨大なので、駆け足で回っても小半日はかかる。また、基本的に食堂がないので、お弁当持参で1日かかるとなると、それだけの価値は「ある」。

アクセスは少し不便だ。モスクワのベラルーシ駅から電車で約1時間。クビンカ駅で下車した後、小一時間の徒歩かタクシー(たぶんモスクワのホテルでエクスカーションを注文した方が手取り早い)。場内は味も素っ気もない倉庫のような建物が並ぶ。これが「戦車博物館」。第一次世界大戦時の英国マークV型戦車からロシア陸軍現役主力戦車のT-90に

り換えたり、あるいはエンジンを改良したりと様々なアイデアが試されたことが分かる。あたかも大昔の恐竜がさまざまに進化し、そして滅んでいったように、ここに並んでいる兵器たちも当時の技術の粋を凝らして開発され、そして第一線を退いて行ったのだ…などと感傷にふけている暇はない。なにしろ展示台数が膨大なので、駆け足で回っても小半日はかかる。また、基本的に食堂がないので、お弁当持参で1日かかるとなると、それだけの価値は「ある」。

入場料 大人400ルーブリ、最寄駅はクビンカ Кубинка、そこから徒歩かタクシー(シーズン外はバス休止)

(<https://goo.gl/maps/umYwPLSGcQz>)

(札幌大学地域共創学群教授)



卒業証書が「証明」するもの

倉田 有佳

函館市内の某高等学校の卒業式でのことだ。ある生徒が、卒業証書を受け取ったとたん破ったそう。驚かずにいられないが、同校ではこのような生徒が数年に一人や二人いるらしい。だが、面白半分でやったのではないことは、同校の学力レベルを考えればわかることだ。

筆者の子どもの頃は、額に入れた卒業証書が家の鴨居に飾られているお宅をよく見かけた。今では家の造りも変わったが、学位記ですら額に入れて飾ることは珍しい。

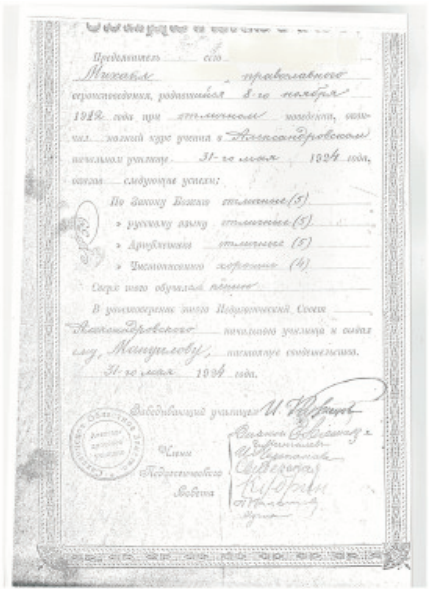
だが、卒業証書が命の次くらいに重要な書類として扱われた時代があった。第二次世界大戦後、外地から苦勞して引揚げて来た方の回想記を読むと、母親が子どもの在学証明書や卒業証書、あるいは成績証明書を風呂敷に包んで大切に持ち出し、そのおかげで、内地の高等女学校に編入できたなどといった話が出てくる。当時の高等女学校といえれば狭き門で、本人の学力や親の経済力もさることながら、女性が学問を続けることへの親の理解も必要だった。

引揚げ時に持ち出せる荷物は限られており、長い道中、手放さざるを得ないモノも少なくなかったはずだ。だが、引揚げ後の子どもの将来を考え、親は内地に無事たどり着くまで書類を守った。

卒業証明書が、自己の存在を証明する唯一の書類となることもあった。日本軍の保障占領末期(1924年秋～1925年5月)に北樺太(北緯50度以北のサハリン島)からロシア人の両親と共に日本へ避難し、その後日本に留まったミハイル少年(1912年11月生)の場合だ。氏名・生年月日を証明する唯一

の書類が亜港(アレクサンドロフスク)の小学校の卒業証明書だった(このエピソードと証明書のコピーは宮本立江氏提供)。

1924年5月31日付でサハリン州ゼムストヴォオが発行したロシア語の卒業証明書(写真)は、生年月日、姓名・父称、アレクサンドロフスク初等学校での神学、ロシア語、算術、書き方の成績、そして課外授業で「歌」を勉強したことを証明している。ちなみに日本軍が開校した小学校は、1924年3月現在22校(生徒数887人)あった(『大正12年乃至大正14年 薩哈連州駐兵史』参謀本部、1940年)。



現代の若者が卒業証書を重要書類と思わないことは、平和な時代の「証明」でもある。証明書を発行する学校や役所が突然機能を停止する、存在しなくなる、ましてや国家が崩壊するなどといったことを想像せずに生きていられるのだから。

「家族全員が戦争体験者」だった時代から、「家族の中に一人は戦争体験者がいた」時代へと移っていった「昭和」。そして日本国内で戦争がなく、日本が戦争を起こさなかった「平成」。その「平成」の時代も終わりに近い。

(ロシア極東連邦総合大学函館校教授)